九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

統計学批判序説

大屋，祐雪

https://doi.org/10.15017/4474748

出版情報：經濟學研究. 42 (1/6), pp.97-109, 1977-05-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

統計学批判序説

大　屋　祐　雪

一　『歴史性』について
二　『統計批判』をめぐって（以上本号）
三　批判の視座と主体の視座（以下別号）
四　『批判的』と『科学的』

一．『歴史性』について

（1）

統計調査に類する社会的行為は，資本主義に先行した社会経済体制のもとでも，たしかに行われていた。しかしながら，それは本質的には統計の作成を第一義の目的とするものではなかった。調査結果である記入済の個票は，なによりもまず，『調べる』ことの直接の政治的目的，たとえば徴税，徴兵，賦役等々のために，一種のインベントリイ（inventory）の役割を果さねばならなかった。センサス（census）の語源がその間の事情を如実にしめしている。

「ローマ人は歴史に現われた瞬間から，その仮借するところなき権力政治を支えることにおいて，卓越した行政家であり，実際的な政治家であることを示した。彼らは，最初から，キケロの次の言葉を忘れていなかった。いわく，『国家を知ることは，元老院議員にとって必要なり』と。

規則正しく五年目毎に行われるところの，Zenzus（census，センサス，国勢調査…引用者）は，共和政時代においては，家長を通して，その家族のものの氏名，体性，年令，住所の申告を伴う法律上の人口調査であり，それは財産の申告と一緒に行われていた。しかしその範囲は市民に限られていた。後に至って，帝政の下においては，奴隷の数もまた調査され，国籍，職業，業務等に関する記入も蒐集されるようになった[1]」。

「この名前（Zenzus…引用者）は，現代の統計学，特にイギリス系の諸国に引きつがれている。たとえばアメリカでは，その規則的な10年毎の間隔で行われる人口および多くの経済状態の測定をセンサス（census）とよんでいる。ローマのセンサスはまず第一に租税名簿の作成のために用いられたが，また統計的にも加工された[2]」。

どういう社会においても，統計は，論理的には，個票記載事実（individual survey mattrs）の揚棄（止揚）の上に成り立つものであるが，資本主義以前の統計的記録は，支配階級の直接の関心事である個票の第一次的な使用価値は，それはそれとしてそのまま保持しながら，支配領域に関する数量的情報の獲得のために，調らべたことの直接の延長として作成されていた。したがって，調べた結果が統計的記録にまでなるかどうかは，そのときの支配階級の識見ないしは支配者の恣意に属することであった。

そのように，調査が行財政から，絶対的にも相対的にも，独立でなかった時代には，調査もその結果も，文字通り為政者のもので，領民はもっぱら調らべられ，支配され，収奪される存在でしかなかった。したがって，彼らは調査にたいして嫌悪感や拒否反応こそもったが，近親感や知的好奇心など，およそ持ちようもないことであった。

こうした事情から調査法（survey methods）や調査結果に関する研究もまた，そういう社会では，支配階級に属する特定の人々（たとえば調査事業担当者），ないしは，たまたまその時

代を生きた奇特人の個人的関心事にすぎず，被支配階級にとってはまったくの彼岸事でしかなかった。

政府の統計調査が行財政の一環として実施されながらも，本来の統治行為から相対的に独立した形態をとるのは，近代資本主義以後のことである。

政府業務統計の作成は，こんにちでも「非統計的目的で確認ないしは記録された事件，事象に関する業務上の記録や計数から，業務上の下部機構を調査客体(調査単位または報告単位)として，上意下達の組織系統で行われている[3]」が，しかしこの形式では資本主義的政治，経済，社会のごく限られた側面しか，統計形態(statistical form)にすることができない。なぜならば資本主義社会においては企業も団体も個人も，その日常活動に関して，行動予定とその結果とをいちいち時の政府に届け出る義務は——法的に規定された特定の事項をのぞけば——原則として担っていないからである。それどころか「プライバシイの尊重」と「企業の秘守」はこの社会の理念とさえなっている。したがって「自由」な個人の生活と「無政府的」な生産，流通の諸事象は，その本性上，政府業務統計にはつながらない。

資本主義の生成期には政府は『夜警国家』として，個人の生活にたいしても，産業にたいしても，比較的に無関心であることができたので，当時の統計といえば土地，人口，犯罪，ならびに租税等に関する記録や資料が大部分で，形の上でもまだ統計的素材の域をでるものではなかった。

資本主義が発展し，そこに内在している社会的経済的諸矛盾が顕在化してくると，支配階級なかんずく政府は矛盾の爆発ないしはその著しい顕在化をおそれて，種々の政策（とくに経済政策，社会政策）を推進せざるをえなくなる。経済分析や経済計画が経済学者の個人的学問的関心事から，政府自体の重要な行政機能になったことはその反映にほかならないが，そうなると政府は，労働者の雇用と失業の状態，かれらの賃金と生活状況，その意識，企業の投資計画とその実績，生産高，在庫量，販売高等々，株価や物価の動き，農業経済の現状と動向などを，全国的規模で，かつ定期的に，統計として把握しておく必要にせまられる。しかるにこれらの社会経済の重要な諸側面は，どれひとつをとってみても，政府の行財政組織と直結して，その現状や動向が自律的かつ系統的に把握されるものはない。いうならば，それらは資本主義社会では政府業務統計として把握しがたい社会経済の諸現象である。したがって，その現状と動向を統計形態の社会認識にするためには，あらためて『調査（survey)』という認識の網を張らねばならない。こうして，調査計画—実査—集計—表示を手続過程とする統計作成の一形態があらわれる。われわれがこんにち『統計調査（statistical survey)』とよんでいる統計作成過程がすなわちそれである。このようにみてくると，統計調査という統計の作成形態は統計作成の普遍的一般的形態では決してなく，資本主義社会で初めて全面的に開花したものということができる。わが国では，こんにち，中央政府の統計だけでも毎年ほぼ500種のものが，この形態で作成されている[4]。

統計作成のこうした歴史的社会的事情は統計学の理論形成にとってきわめて重大な意味をもっている。なぜならば，同じ年度に多種多様の統計調査が施行されることは，それぞれの調査からそれらに共通な一般的手続過程を折出し，

定式化して，それらを統計調査法にまで揚める思考を容易にするからである。換言すれば，そのことは，それぞれの統計調査が資本主義社会の統計作成過程という歴史的社会的性格をもちながら，しかも，統計調査の一般規定を抽象するのに最も適した形態で，研究者の前にあらわれているということになるからである。

また，同じ統計調査が一定の周期で定期的にくりかえされる事情は，用いられる調査方法を精錬し，定着させ，あたかもそれが超歴史的に合理的な最良の統計作成方法ででもあるかのような方法観を醸成する。こうして統計調査の歴史的被規定性は統計家の意識にはもちろんのこと，統計学者の意識にさえ，もはやのぼらなくなる。

他方，資本主義の発展に照応して，政府の統計事業がある程度整備されると，政府統計の存在を前提した統計利用が支配的な傾向になる。もちろん，利用目的，利用方法，ならびに利用する統計素材は，利用主体が担う社会的分業の具体的な機能に応じて異なるであろうが，年々歳々繰り返される統計利用は，その多様性にもかかわらず，統計調査の場合と同じく，研究者にたいして，統計利用の一般的規定が折出し易い状況をつくり出す。それは，統計学者の関心を統計の利用方法論ないしは統計解析法論へと駆り立てる社会的背景にほかならない。こうしてここにも統計学者の意識から理論の歴史的被規定性を脱落させる社会的学問的条件がある。

このように見てくると，統計学の近代史が統計学＝普遍科学方法論説と社会科学方法論説とに分岐収斂し，これら両「科学方法論説」を基軸として展開してきたことは，決してゆえなきことではない。それだけに，エンゲルス（F. Engels）の次の言葉は，こんにちの統計学にとっても，まことにあじわい深い示唆のひとつではなかろうか。

「『物質的生活の生産様式は社会的，政治的および精神的な生活過程一般を制約する』という命題，いいかえれば歴史にあらわれるすべての社会的および国家的諸関係，すべての宗教制度および法律制度，すべての理論的見解は，それに応ずるそれぞれの時代の物質的な生活諸条件が理解され，かつ前者がこれらの物質的諸条件からみちびきだされるばあいにだけ，理解されうる，という命題は，単に経済学にとってばかりでなく，すべての歴史科学（自然科学でないすべての科学は歴史科学である）にとっても，ひとつの革命的発見であった。『人間の意識がかれらの存在を規定するのではなくて，人間の社会的存在こそがかれらの意識を規定する』。この命題は，非常に簡単であるので，観念論的なまよいにとらわれていないひとならば，だれにも自明であるにちがいない」[5]

1）統計学古典選集　第6巻　ワグナー『統計学』（大内兵衛訳）18—19頁。
2）P. Flaskämper, Die Allgemeine Statistik, 2Aufl., 1949, S. 234（大橋・足利訳『一般統計学』，1953，320頁）。
3）大屋祐雪「わが国の統計事情（1）」，『唯物史観』（河出書房）第3号，1966，223頁。
4）大橋・高木・大屋編『経済統計』（有斐閣双書）1973，19頁。
5）F．エンゲルス「カール・マルクス著『経済学批判』」（岩波文庫　マルクス『経済学批判』附録，256—7頁）

（2）

経済統計研究会の第一回総会（1957年7月）の共通論題は「日本の現段階における統計学の基本問題」であった。関西事務局がとりまとめた『報告および討論要旨』によれば，わたくし

の発言は次のようになっている。

「今までの伝統にたって，統計学を普遍(科学)的な方法（論）と考えれば，（それは）数理統計学に帰し，社会科学に限定すると蜷川氏の体系におちつくと考えられる。方法に重点をおく立場からは，何故，統計が本当のものにならないか，ということ（体制的側面の把握）が，別個の問題になってしまう。これを問題にするには，現実の統計活動――その結果が統計――を一つの特殊な社会的活動と考え，この活動自体を統計学で問題にする立場が必要である。統計体系，統計制度と結びついた統計技術を再反省しなければならない。そうすると，片方に数理統計学が残るのだが，それは本来(統計学とは)別個のものである。数理統計学で解明されたもの（数理）を，（統計）技術として使うかどうかは，その経済（体制）と結びついて決ると考えられる[6]」

この発言はあまりにも粗放にすぎる。しかしながら，先学たちの貴重な遺産に接しながらも，なおなにか満たされなかった統計学に対する当時の心情が思い出されてなつかしい。統計学の研究方法ないしは研究様式にかんして再び述べる機会をもったのは，第八回総会（1964年）における「反映＝模写論の立場と統計学」と題する研究報告[7]においてである。この報告で，わたくしは，これまで学んできた統計学にたいして，つね日頃いだいていた疑問を提示し，統計学研究の在り方，アプローチの仕方について，かなり思い切った私見を述べている。本報告と質疑のなかで，わたくしが強調した点は次のことであった。

㈠ 統計，なかんずく政府統計の作成は，いまや社会的労働の特別の形態として，歴史的にも社会的にも，ある種の独自性と恒常性とをもち，また統計的研究からも相対的に分離独立した社会的地位，性格，および役割をもつに至っている。

㈡ 経済分析や経済計画も，研究者の科学的関心事から，いまや官庁エコノミストの機能となり，さらに行財政の一環として制度化されるに至っている。

㈢ 政府は名実ともに最大の統計生産者であり，最大の統計利用者でもある。したがって，われわれが利用する統計のほとんどは政府統計であり，その作成には，多かれ少かれ，国家と国家目的が絡んでいる。とすれば，政治経済の現段階における国家と統計との関係を追究しない統計学は，おのずから色あせたものにならざるをえない。国家と統計，国家と統計作成の関係は，社会科学としての統計学が成立可能な背景であり，それらの追求は，この学の出発点であるとともに，終着駅である。統計の階級性の問題はこの観点から吟味されねばならない。

㈣ こんにちの統計利用は，利用主体の階級的な立場，世界観，および政治経済学の相異に裏打ちされた，(1)いろいろな管理業務への直接的な利用，(2)社会経済の動向判断ないしは実証的研究のための利用，(3)イデオロギーによる階級闘争の手段としての利用である。そこにも統計利用の特殊歴史的な形態と性格とが看取され，それらは利用目的，利用形態，利用方法を通してあらわれている。

㈤ 上述のことが客観的な事実であるならば，われわれはそれらを一つの社会現象として，すなわち特殊歴史的な社会過程として考察の対象におかざるをえない。そして，それらの対象から，現代社会の統計，統計作成，統計利用の歴史的社会性格とそれらが内包する理論的技術的構造を明らかにすることは，社会科学と

しての統計学を抜きにしては論じえないことである。

(六) 統計学=社会学方法論説では，これらの課題はどのように追求され，どう位置づけられたであろうか。わたくしが学びえたかぎりでは，まだ理論化も体系化もなされていないように思われる。あるいは次のように言った方が，より適切であるのかもしれない。それらは統計学の基本的な課題でもなければ，研究対象として直接問題にしなければならない性質のものでもない。強いてとり上げるとすれば，補論ないしは付随的な研究対象になろう，と。

(七) それでは，どういう視座にたてば，この種の問題が直接的な研究対象となり，上述の課題を果す統計学が構築できるであろうか。これまであまり意識されていなかった研究視座を問題にしたゆえんである。

(八) わたくしは「反映=模写論」（唯物弁証法）を統計方法そのもののなかに持ちこんで統計学を構想する視座に対して，マルクスが資本主義的生産様式の解剖にさいして『資本論』でとった「反映=模写」の視座にならうべきことを主張した。それは，この社会の統計，統計作成，統計利用を上述のように一つの特殊歴史的な社会過程としてとらえ，その発展を歴史的・論理的に追求し，その形態，構造，および運動法則を究明するための思考様式として「反映=模写論」を用いてこそ，社会科学としての統計学を再編できると考えたからである。

(九) このような思考様式に従いながら，われわれは「素材を細微にわたってわがものにし」，現代統計をめぐる諸実践の特殊歴史的な社会性格とそれらの理論的技術的構造とを明らかにしてゆかねばならない。こうして「精神的に具体的なものとして再生産された」理論体系に，わたくしは「統計学」の名を冠したいと思う。したがって，統計学はわたくしにとっては社会科学そのものであり，その理論性格からして他の社会諸科学のための方法論たりえない。他の諸科学，たとえば政治学，経済学，歴史学，社会学等々は，この統計学が明らかにする統計および統計実践にかんする知識体系を，研究素材ないしは参考資料として，それぞれの研究活動に生かすことになろうし，われわれの統計学もまた，それらの諸科学から統計，統計作成，統計利用の背景となった特殊歴史的な社会関係についての洞察を学ぶことになろう。

上述の私見にたいして，最初に近昭夫[8]，伊藤陽一[9]の両氏から，つぎのような疑問と批判が寄せられた。

(1) 統計対象をいかに正しく認識するかという視点に立たない資本論的反映=模写論の視座では，統計批判の観点が欠落し，現行統計の無批判な是認に結びつきはしないか。

(2) 統計調査と利用の過程を認識過程の側面として重視しないために，科学的な統計利用法，ないしは統計の批判的利用への道を閉しはしないか。

(3) 統計利用の事実を客観視するということが，適用方法の科学性に関する諸問題を度外視することになり，ひいては数理的方法を是認することになりはしないか。

これらの疑問と批判にたいして，私は，社会科学にける『批判』の意味を述べることによって，私の立場が批判の視座として不当なものでも，非科学的なものでもないことを示したつもりである[10]が，立論はあまり説得的ではなかったらしい。なぜならば，その後も，社会科学方法論説をとる人びとから，同類の批判が寄せられているからである。

そこでその後に寄せられた批判をもふくめて論点を整理し，私見を述べたいと思う。

（注）論点の整理は，当事者にとっては，ある種の余計ごとであり，またややもすれば我田引水の要約に堕する恐れなしとしない。しかしながら，主題の展開が経済統計研究会の総会報告やその機関誌上でなされている部分も少なくないので，本誌上でこの問題をとりあげるにあたり，あらかじめ論争の経過を再録し，行論に役立てたい。

6）経済統計研究会関西事務局編『日本の現段階における統計学の基本問題』1957，8頁。<なお，引用にさいしては（　）の言葉をいれて発言を補足している。>

7）大屋祐雪「反映＝模写論の立場と統計学」『統計学』第13号（1964）所載。

8）近　昭夫「いわゆる『統計学＝反映・模写論』への疑問」『統計学』第26号（1973）所載。

9）伊藤陽一「統計学の課題によせて」『社会科学と統計』4号（1973）所載。

10）大屋祐雪「批判統計学の前進のために」『統計学』第27号（1973）所載。

二．『統計批判』をめぐって

（1）

まず，近氏の批判をきこう。最初の批判だけに多岐にわたる論点が包括的に提示されている。したがって，そのすべてに対して同時に答えることは，私のよくなしうるところではない。しかしながら，論争が問題の所在をおのずと明確にするので，その展開にそいながら私見を述べることが，ここではさしあたっての賢明な一工夫であるように思われる。

「『反映・模写論』は，現在われわれが主要な研究課題として考えている社会科学的見地からの統計批判とその加工・利用，および数理的諸方法の非科学性の批判の意義を過少評価するような契機を含んでいるように思えてならない[11]」。

「わたくしが統計の信頼性，正確性の問題を重視するのは，……与えられる統計をそのまま利用することは，対象についての現象的な誤った認識，誤った結論に導かれることが多いからである。したがって，研究に際しては，何よりもまず統計が対象をどのように反映しているのか，あるいは対象が統計にどのように歪んで反映されているのかを検討する必要がある。このような検討を経て初めて，われわれは統計を正しく加工，利用できるようになる[12]」。

「『反映・模写論』はこのような考えとは，全く対立した見解をもっている。そこではもはや，統計の対象反映性，統計の利用方法の科学性は主要な課題ではない。統計，統計調査，統計利用はいわば所与の客観的な事実であり，それ自体が研究の対象であり，それらのもつ『特殊歴史的社会的特徴を明確にすること』こそが統計学の課題である[13]」。

「対象をいかにして正しく認識するかという観点が統計の対象反映性，統計利用法の科学性に関心を集中させるのに対して，『反映・模写論』は統計，統計調査，統計利用をまず客観的事実としてそのまま受けとり，その歴史的・社会的被制約性の解明を主要な課題としている[14]」。

伊藤氏もまた「大屋会員を中心とするメンバーの年来の主張は，会計学＝上部構造説との細部的な異同は未だ不明であるとはいえ，いわば統計学＝上部構造説的といってよいように見える。私がここで上部構造説的といって注視するのは，統計の歴史的特質が経済過程＝土台と政策と理論によって性格づけられるというそれ自体異論のない視角に立ちながら，次の困難を含むと考えるからである。すなわち，ここで，いわゆる統計の特質は，経済過程，政策的要請から直接的，外的に説明されるにとどまり，それ

らが認識過程——対象の反映過程——にどうかかわり，認識結果たる統計に，客観とのどういった乖離を生み出しているのかにまで立ち入らない。統計調査と利用の過程が認識過程という側面をもつことを重視したのが方法論派であったのだが，いわゆる上部構造説にあっては，この点が欠落する。このことは統計の批判的利用への途を閉ざす[15]」と論難される。

私見と「会計学=上部構造説」との異同については，検討したい欲望に駆られないわけではないが，それはしばらく措くとしても，さしあたってつぎのことだけはここで確認しておかなければならない。

それは，両氏の批判が，わたくしの統計学にあっては統計，統計調査，統計利用の「特殊歴史的社会的特徴」ないしは「その歴史的社会的被制約性の解明」こそが，主要な課題であり，それらのもつ「認識過程という側面」ないしは「統計の対象反映性」は，そこではもはや主要な課題ではない，という私見にたいする理解から出発している点である。

たしかに私は，いくつかの論文で「現代社会の統計，統計調査，統計利用の諸特徴および諸形態を，ひとつの特殊歴史的な社会現象として，社会科学の見地から『反映=模写』し，『一つの精神的に具体的なものとして再生産する』ことが，統計学の任務である[16]」という主旨を述べている。しかしながら，そのいずれにおいても，批判者たちが理解しているように考えて，この一文を草しているわけではない。とはいえ，私の表現がそういう理解をうむのであれば，それはひとえに拙文のゆえといわざるをえない。なぜならば，この一文は私の研究様式を示す序文的なもので，それにつづく本論では，先学たちの統計調査論に拠りながら，資本論的反映=模写論でいう「二重の見地」，「二重の分析」が，統計調査の社会科学的考察にとって，研究様式として，いかに必要であるかをくりかえしのべているからである。たとえば F. Zizek の統計調査論を吟味したのち，私はつぎのようにのべている。

「官庁の統計調査が行財政の一環として実施されながらも，調査個票が調査個票として運用され，それが統計的転換過程の個別データーとしてもっぱら利用されるような統計作成の形態（チチェックの用語にしたがえば『原則的目標設定』の統計数字獲得過程）は，資本主義社会においてじはめて全面的に実施され開花したものである。しかるに，そのような形態が社会で支配的な統計数字の獲得過程になると，人はその形態が本来的に担っているその特殊歴史性には気付かずに，その形態を統計数字獲得の一般形態ないしは普遍的な形態と思いこむ。チチェックの場合がまさにそうである。したがって，チチェックがえたものは，統計数字獲得のための基本的方法行程の一般的抽象的側面であって，それを担いそれを現実に動かしている歴史的社会的側面は，彼の統計調査論には反映されていない。それは，彼が特殊的，具体的，個別的側面と歴史的社会的側面とを混同して，基本的方法行程の考察からはずしてしまっているからである。

『原則的目標設定』の統計数字獲得過程は，もともと一般的抽象的方法行程と歴史的社会的方法行程の統一体として，個別的具体的特殊的な行程を形成している。したがって，その個別性，具体性，特殊性を捨象しても，一般的抽象的方法行程と歴史的社会的方法行程の二側面は，統計数字獲得の本質的な性格として考察の対象にのこっている。したがって，その理論的

再生産（すなわち統計調査論の展開）においては，ちょうどマルクスが資本主義的生産過程の考察にあたって，≪労働過程と価値増額過程≫という二重の見地から分析をすすめたように，目標設定，指導的統計家とその決定，統計的補助力と統計的労働行程のそれぞれについて，一つには一般的方法行程としての分析，そして二つには歴史的社会的方法行程としての分析をおこない，そのうえで統計数字獲得のための基本的方法行程を両方法行程の統一として展開する必要がある。そういう分析にもとづいてこそ，資本主義的統計調査の性格は，はじめて十全にこれを把握することができると私は考えている。チチェックにおいては二重の見地の一方が完全におちているといわねばならない。この点がチチェック統計調査論にたいする私の根本的な批判である[17]」

付言するまでもないことであるが，私はここで，統計調査の一般的方法行程の考察が主要でない，などと言っているわけでは決してない。そうではなくして，F. Zizek が「わたくしは，統計数字の獲得にさいして現に守られており――また当然守らねばならない――『基本的方法行程』をえぐり出し，そうすることによって統計数字獲得に固有の本質を科学的にあきらかにしようと思っている。もしもわたくしがこのことに成功するならば，わたくしは疑いもなく科学的統計方法論の中心的課題の解決に一歩近づいたことになろう[18]」と自負していることに対して，Zizek の意図がたとえ完全に果されたとしても，彼の研究様式では，統計数字の獲得過程を規定している歴史的社会的側面は，すこしも把握されないことを批判したものである。

つぎに私は F. Zizek との好対照として蜷川虎三氏の統計調査論をとりあげているが，そのさいも研究様式にふれ，重ねて次のように述べている。

「わたくしは，社会諸科学における反映＝模写論の適用は，『資本論的』反映＝模写論の立場でなければならないと考えている。この立場からみれば，蜷川理論のなかにある水平的反映＝模写の見地がそれに近い。しかしながら，博士にあっては，統計の吟味，批判にかかわりがあるかぎりで統計調査に関する社会科学的考察がなされているので，その水平的写像も『資本論的』反映＝模写論の立場からなされる写像とは一致しない側面をもっている。

とはいえ，『資本論的』反映＝模写論があきらかにするはずの二側面（一般的抽象的側面と歴史的社会的側面）のうち，統計の吟味，批判の見地に対応する側面，すなわち統計調査の歴史的社会的側面のすくなからざる部分が，博士によって理論的に再現されていることは，すでに紹介した通りである。しかしながら，一般的方法行程論の側面については，それがもっぱら≪統計≫という認識の特殊性格にかかわるだけで，統計の信頼性に関係することがないので，蜷川理論ではおのづから軽視される結果となっている。

わたくしは，これまでいく度となく，統計数字の獲得過程（すなわち統計調査）は，こんにちの歴史段階では，それ自体が特殊歴史的な社会現象であるから，その理論的再生産（統計調査論の展開）にあたっては，二重の見地からの分析が必要であることを強調してきた。そして，その二重の分析が，一つには現象（ここでは統計調査という統計作成の一形態）の一般的抽象的側面（すなわち統計調査の一般的方法行程としての特質）の分析，二つには，それを担いそれを現実に動かしている歴史的社会的側面

（すなわち統計調査が担っている社会体制からの被規定性）の分析でなければならないことも，すでに指摘してきたところである[19]」

「チチェックは指導的統計家の経験をもつがゆえに，無意識のうちに統計調査者の立場に立ち，蜷川博士は批判的経済学者として，意識的に統計利用者の立場に立って，大量観察法を論じているが，前稿と本稿において吟味したように，両者の統計調査論は好意的にみても，統計調査がもつ二側面の片方をそれぞれ一面的に性格づけ，定式化したにすぎない。しかも，後者にあっては統計学＝社会科学方法論という志向が強いために，その片方の理論化についてさえ，卓見を展開しつつも，統計調査論としてはいくつかの未展開部分をふくむ結果となっている。したがって，両者は統一され，補完されてこそ，まともな統計調査論となることができる。しかしながら，そのためには思考様式としての『資本論的』反映＝模写論が必要であるように思う[20]」

ところで，これらの拙文は，私が，統計と統計調査にかんしてその歴史的社会的性格のみならず，その一般的抽象的側面，すなわち一般的方法行程の考察をも，統計学の主要課題と考えていることの証左とは受けとれないものであろうか。まず，その点についての共感をえておきたいと思う。

もし，その理解がえられるならば，「そこではもはや統計の対象反映性は……主要な課題ではない」とか，あるいは「ここで，統計の特質は，経済過程，政策的要請から直接的，外的に説明されるにとどまり，それらが認識過程――対象の反映過程――にどうかかわり，認識結果たる統計に，客観とのどういった乖離を生み出しているのかまでは立入らない」とかいうことにはならないであろう。なぜならば，「統計調査という行為はもともと社会現象の数量的反映という特殊な社会認識（統計の作成）にほかならない[21]」ので，それをそういうものとして反映＝模写し，「二重の見地」から精神的にわがものにすることは，統計調査における対象と統計の反映関係を，その構造，形態，性格のすべてにわたって理論的に再生産することになるからである。換言すれば，統計調査が統計形態の社会認識を獲得することをもって，他の社会的実践から区別されているのに，対象の反映過程，すなわち対象が統計表に表現されるに至るさまざまの諸契機を，本核的に考察しないのであれば，そのような研究様式は，私がいう『資本論的』反映＝模写論とはまったく無縁のものといわざるをえないからである。

私がそう主張するとき，批判者たちは，おそらく，「統計の対象反映性」ということについて，私の理解が十分でないことを云々されるであろう。なぜならば，「対象をいかに正しく認識（して，正しい統計に）するかという観点」が，「統計の対象反映性に関心を集中させる」ことであるのに，資本論的反映＝模写論ではその正しい観点が研究課題にならない。したがって，たとえ私が「素材を細微にわたってわがものにし」，「二重の見地」から統計数字の獲得過程を，理論的に再生産することができたとしても，究極のところ，それは，現行統計調査のうちで最も原則的かつ一般的な統計調査について，その「二側面」の特質を把握することに成功したにすぎない。「統計の対象反映性」ということに即していえば，私（大屋）が問題にしている統計の対象反映性は，いわば「現行」統計における対象反映性で，われわれがいう科学的な意味でのそれではない。科学的な意味での

対象反映性の観点がなければ，統計批判の基準がえられないのは当然ではないか，批判者たちの立論からすれば,結論はそうなるはずである。

ところで，資本論的反映＝模写の視座と科学的な統計調査ないしは対象反映的統計調査過程の問題は，そのご，野沢正徳氏によってより鋭く指摘されているので，節をあらためて言及したいと思う。

11)，12)，13)，14) 近　昭夫「いわゆる『統計学＝反映・模写論』への疑問」(前掲)，79—82頁。
15) 伊藤陽一「統計学の課題によせて」(前掲)，3頁。
16) 大屋祐雪「F.チチェックの統計調査論」(『四〇周年記念経済学論文集』，1967年)，345—6頁，「統計調査の社会科学的考察（一)」(九大『経済学研究』，第31巻，第5・6合併号)，39—40頁。
17) 大屋祐雪「F.チチェックの統計調査論」(前掲)，369—70頁。
18) F. Zizek, Wie statistische Zahlen entstehen, 1937. S. 2。
19)，20) 大屋祐雪「統計調査論における蜷川虎三」(九大『経済学研究』，第32巻，第5・6合併号) 179—181頁。
21) 大屋祐雪「同前」，177頁。

(2)

ここで，もう一点ふれておかなければならないことがある。それは資本論的反映＝模写の視座が「現行統計の無批判的な是認に結びつく[22]」という指摘についてである。

この点に関しては，批判者の見解，必ずしも一致しているわけではない。近氏が，私の研究様式と統計批判の欠落とを，論理必然のものと理解されるのにたいして，伊藤氏は「統計の歴史的性格を重視する視角と，上に指摘した欠陥とは論理内在的につながっているとはいえない」としながらも，「統計の批判的利用への途を閉す[23]」ことを指摘される。それにたいして，前稿「批判統計学の前進のために」(『統計学』第27号所載）では，「統計の信頼性，正確性，したがって統計の階級性をも含めて，それらは現代社会の統計，統計作成，統計利用の歴史的社会的性格とそれを支える理論的技術的構造に基因するものであるから，それらの点をまず明らかにし，さらに統計の作成過程を≪二重の見地≫，すなわち理論的技術的見地と歴史的社会的見地から分析して，その基本的方法行程の特質を体系的に示すことができる資本論的反映・模写の視座こそ，統計批判を十全におこなうことができる観点である，と言うほかはない[24]」とこたえているが，要するにこの問題は，『批判 Kritik』ということを，われわれがどう理解するかにかかっている。ところで，「批判の成立」はまさに哲学上の認識にかかわる問題である。したがってその正否を論ずることは，とりもなおさずお互の認識論を問うことにほかならない。しかしながら，いまここでは，そこまでさかのぼって根本的に議論する必要はない。なぜならば，批判の規準 (Norm) になるような規範的要素の提示によって，批判は初めて成立可能であるという立場と，社会的存在ないしは実践にたいする批判（すなわち社会過程の批判）は，その構造と運動法則とを，歴史的・論理的に，あますところなく解明することであり，批判される対象を生みだす社会の物質的条件そのものの変革，止揚によって批判は完成するという立場とが，あることを確認しておけば，ここではさしあたりこと足りるからである。

われわれの課題に即していえば，統計，統計作成，統計利用は，これまでくりかえし指摘してきたように，一種の社会過程であるから，そこでの「批判」は，上述のようにそれらを「≪二重の見地≫，すなわち理論的技術的見地と歴史的社会的見地から分析して，その基本的方法行

程の特質を体系的に示すこと」でなければならない。そしてその見地は資本論的反映=模写の研究様式にほかならないので，われわれがこの研究様式を十分わがものにし，それに忠実であるかぎり，その研究成果は現行のそれにたいしてすぐれて「批判的」なはずである。しかも，資本論的反映=模写の視座は，その考察を通して統計，統計調査のみならず，その方法的規定である統計調査法についてさえ，「物質的生産に照応して社会的諸関係を形づくるその同じ人間が，彼らの社会的諸関係に照応して，諸原理，諸観念，諸範疇をも形づくる。したがって，これらの観念，これらの範疇は，それらが表現する諸関係と同様に，永久的なものではない。それらは，歴史的な，はかない，一時的な産物である[25]」という見方をしようというのであるから，その立場がさきに指摘した後段の批判的見地であることは，いまさらあらためて云云するまでもないことであろう。

ところで，岩井浩氏は『社会科学としての統計学—日本における成果と展望—』(1976年)の第5章「政府統計批判」のなかで，その成果を総括し，つぎのように記している。

「統計批判の前進として注目されるべきものは，統計の信頼性，正確性の吟味・批判を，その統計の歴史的・社会的特質との関連において行っているものである。統計調査を規定する客観的諸条件，すなわち資本主義の発展の諸段階における国家（資本）のイデオロギー，政策との関連，また国家の行財政機構としての統計制度との関連において，統計の批判的研究をおこなっていることである。……この視点からみると，資本論的・反映模写論=統計学実質科学説の立場からの大屋祐雪の統計調査，統計体系，統計制度の資本主義的特質の研究は積極的な意義をもっている。大屋は，統計調査過程を組織的技術的側面と歴史的社会的側面の統一としての客観的労働過程としてとらえ，資本主義社会では，その『組織的技術的行程も社会体制的側面と適合するかたちでしか有効性を発揮することができない』とする。そして，『統計調査や統計の吟味・批判を社会体制がうみだす統計作成の特殊歴史的な技術構造，すなわち，資本主義的統計作成の手続過程と関連させて論じる』ことの重要性を指摘している。

大屋の実質科学としての統計学の所説については，幾つかの批判と反批判がおこなわれているが，大屋の統計，統計調査の歴史的資本主義的特質の把握，統計と国家の関係の解明は，蜷川以来の社会科学方法論説が，統計方法を主たる研究対象とするがゆえに，統計調査の客観的過程，その歴史的，社会的要因の把握をその対象のかたわらにおいてきたことに対する正当な批判であり，かつ大きな意義をもつものであった。ただ，これまでのところ，大屋の統計，統計調査，統計制度の研究は，主に，その社会体制との対応・適合関係において考察されており，統計の階級性，すなわち，ブルジョア統計の歴史的資本主義的特質を踏まえての統計の信頼性，正確性，統計の現象反映性と事実隠蔽性の吟味・批判へと深化していないように思われる[26]」

たしかに，私はこれまで，統計，統計調査，統計制度の社会体制からの被規定性の側面を目的意識的に考察してきた。しかしながら，それは，私にとっては「素材を細微にわたってわがものにし」，統計調査論を構築するための準備的作業であり，また「統計の階級性，すなわちブルジョア統計の歴史的資本主義的特質を踏まえる」ための私なりの努力でもあった。という

のは，このような研究を抜きにしては，ことの本質が解明されないとするのが，資本論的反映＝模写の研究様式だからである。

とはいえ，統計と統計調査にかんする私の仕事は，これまでのところまだ，理論面においては，F. Zizek と蜷川博士の労作に依拠しながら，部分的に私見を述べているにすぎず，政府統計の批判についても具体的な批判の実をまだ数多く示していないのであるから，「ブルジョア統計の歴史的資本主義的特質を踏まえての統計の信頼性，正確性，統計の現象反映性と事実隠蔽性の吟味・批判へと深化していないように思われ」ても，それはいたしかたのないことといわざるをえない。なぜならば，この種の議論においては研究の具体的な展開が立論の正当性の主張にとって不可欠なものだからである。そう思いながらも，ここではやはり，エンゲルスの「ただひとつの歴史的な事例についてさえ唯物論的な把握を展開しようとすれば，それは，おそらく数年にわたる静かな研究を必要とする科学的な仕事であっただろう。なぜならば，ここでは，単なる言葉だけでは，なんにもならないこと，大量の，批判的に検討され，完全に使いこなされた歴史的材料だけが，こういう任務を解決する力のあることが，明らかだからである」[27]という一文に，私のこころひそかな弁明を託したいと思う。

それはそれとして，上述の議論にかかわる次の一文を掲げておく。

「統計批判の基礎は，政府統計の基本的性格，その階級的性格の把握にある。独占資本とその政府は，資本主義の一定の発展段階に対応する諸政策の作成と実施，また諸政策の実施効果の判定のために，政策対象に関する一定の数量的認識を必要とする。政府（独占資本）は，このブルジョア的社会認識の一つの有力な大量的認識方法，手段として統計調査ならびに統計利用を行う。ここに政府統計の階級性の基本的規定がある。政府の統計調査過程は，一面ではブルジョア経済学と統計理論の適用によるブルジョア的認識過程であるとともに，他面では，行政機構の一環としての統計調査機関と統計職員（労働者）の組織を通じての客観的社会過程でもある。統計批判の全面的展開のためには，政府の統計調査をブルジョア的認識過程と客観的社会過程の統一として把握することが肝要である[28]」

ここには，私がこれまで強調してきた「現代社会の統計，統計作成，統計利用の歴史的社会的性格とそれらが内包する理論的技術的構造を明らかにすること」の重要性が，一層の具体性をもって語られている。しかし，この文章は私のものではない。さきの『総括』につづく『統計批判の課題』における岩井氏の言葉である。

資本論的反映＝模写の視座と統計批判の欠落とは論理必然という近氏の指摘から始まったこの論争も，こうしてひとつの落ちつくべくきところに落ちついた感がある。

それでは，岩井氏が政府統計の批判を通じてこんにち到達した『課題』と，私見とはどういう関係にあるであろうか。

さきの文章を想起しよう。岩井氏は「政府の統計調査過程は，一面ではブルジョア経済学と統計理論の適用によるブルジョア的認識過程であるとともに，他面では，行政機構の一環としての統計調査機関と統計職員の組織を通じての客観的社会過程でもある」という理解に立って，「統計批判の全面的展開のためには，政府の統計調査をブルジョア的認識過程と客観的社会過程の統一として把握することが肝要である」

という。

みられるとおり，岩井氏にあっては「ブルジョア的認識過程」と「客観的社会過程」とが，統計批判のために統一的に把握されねばならない「一面」と「他面」とであるが，私にとっては，既述のごとく，それらはともに統計調査の歴史的社会的側面であり，政府統計調査が社会体制から規制されている一連の諸契機である。したがって，私においては，統計調査が統計形態の社会認識たるために一般的に具有すべき原則的方法行程の「抽象的一般的側面」が，統一的に把握されねばならない統計調査過程の「他面」をなす[29]。

要するに，岩井氏と私とでは，統一的に把握しようとする二側面のとらえ方に違いがあるということである。しかしながら，それは抽象と具体化，分析と綜合，等々の研究様式にかかわることであるから，ここではさしあたりその事実だけを確認しておきたい。

ところで岩井氏は，「統計調査過程を認識過程と客観的社会過程の統一として把握することが，統計批判の発展にとって不可欠である[30]」ともいう。ここでは「認識過程」という言葉に，「ブルジョア的」認識過程にたいする「対象反映的」ないしは「科学的」認識過程の意がこめられている。統計の信頼性，正確性の吟味は，統計調査過程のそのような統一的把握によって，その基準があたえられるというのである。

図式的にいえば，統計調査の「客観的社会的過程」にたいして，「ブルジョア的」認識過程と「対象反映的」認識過程とが互換の可能性ある契機として位置づけられ，「対象反映的」を「ブルジョア的」に対置することによって，政府統計の批判が十全に展開できるという立論である。そこには科学的統計調査法論の顔がある。　（未完）

22）近　昭夫「前掲論文」，87頁。
23）伊藤陽一「前掲論文」，3頁。
24）大屋祐雪「批判統計学の前進のために」（前出），62—3頁。
25）K.マルクス『哲学の貧困』，マル・エン全集（大月版），第4巻 134頁。
26）岩井　浩「政府統計批判」，経済統計研究会『社会科学としての統計学　—日本における成果と展望—』，1976年，130頁。
27）F．エンゲルス「カール・マルクス『経済学批判』」（前出），258頁
28）岩井浩「同前」，132頁。
29）本稿，103～105頁参照。
30）岩井浩「前掲論文」，131頁。